

震災後 農業Uターン

相馬・菊地さんの自然卵人気

相馬市大野地区の菊地将兵さん(29)が、有機栽培飼料などで育てたニワトリの自然卵の販売を始めた。東京暮らしで「農業の強さ」に目覚め、東日本大震災直後にUターンした。環太平洋経済連携協定(TPP)の合意で、大規模化による競争力強化が強調される。が、菊地さんは「小規模でも良質な農作物の産地地産地消こそが本来の農業のあり方だ」と意気軒高だ。

相馬市郊外の水田地帯にある長さ50坪のビニールハウス。菊地さんと妻・陽子さん(30)が経営する「大野村農園」の鶏舎だ。

放し飼いのニワトリ110羽が産むのはまだ1日40個ほど。「葉を使わずに最高級の卵を産んでもらおう」と手間をかけるため、同農園の「相馬ミルキーエッグ」は10個入り1パック770円(950円(配送箱入り))と割高だ。それでも「安心安全な地元食材だ」と評判は上々。いまや市内だけでなく、隣の南相馬市の食堂からも定期予約が入る人気だ。

足元に答え

菊地さんは、働きに出ていた母親の代わりに祖父母に育てられた。家ではインスタント食品など食ったことがない。春の山菜、秋の新米にキノコごはん、冬はつゆモチ……。母子家庭で

長男の松陰君(2)と見守る菊地将兵さん(相馬市大野)



トリ放し飼いでエサに工夫 栄養十分

大野村農園のビニールハウスに入る。もみ殻がぎっしりと敷き詰められている。その上をニワトリたちが元気に走り回る。黒い横じま模様美しい。ハウス横の運動場に自由に出て、太陽光を存分に浴びることもできる。ストレスを与えないための放し飼いだ。

純国産鶏「岡崎おうはん」。菊地さんこだわりの卵肉兼用種だ。4月に愛知県からヒヨコを仕入れて半年。ようやく、特徴ある黄金色の卵を産んでく

れるまでに育った。エサは魚屋でもらった魚のあらを地元米、米ぬかにまぜて発酵させる。放射性物質の濃度はすべて検出限界値以下だ。さらに特製ヨーグルトを毎日食わせる。

病気を防ぐ抗生物質は使わず、ワクチン接種もしない。エサにビタミン剤を入れる代わりに、畑の雑草を食べさせる。春のヨモギ、夏のビワやスイカ、秋のカキの実。季節の野草や果実はニワトリの大好物で、栄養は十分だ。

一歩

裕福ではなかったけれど、祖母は初物にこだわる手料理を作ってくれた。

勉強は好きになれず、仙台市内の私立高校を半年で中退。ゲームセンターに入り浸り、遊んで暮らした。21歳のとき、兄を頼って上京し、その家で居候をしながら働きはじめた。

スーパーで「万引きGメン」をした。高価な商品には一切手を出さず、パンと

お茶だけを盗む中年男性を捕まえた。自分の食う分だけを盗んだという。警察には通報せず、ポツケの500円玉を手渡す菊地さんに、「人に親切にされたのは初めてだ」と男性は泣いた。

初めて本当の貧しさを知った。相馬の実家には米や野菜だけはいつもあった。食うに困るといふことがわかっていなかった。

ホームレス支援のボランティアを始めた。公園で野宿者に炊き出しをした。「何でこんなに貧しい人が多いのか」「活動は一時的な気休めに過ぎないのでは」。自問自答していたとき、岩手県の農家が大量の

反対押し切り

陽子さんと香川県内の農家で出会った。農業研修生で、分子生物学専攻の大学院生。自分と同じく、食の安全を考えながら現場を大切にすることに、菊地さんはひかされた。

故郷で農業を始めよう。

資金作りのため、再び上京してホテルマンをしていたときに震災に見舞われた。故郷は「希望の見えない田園地帯」になっていた。

「こんなときだからこそ相馬に帰って農業を」と決心した。

いま何で相馬で農業なの？ 祖父も、研修先の農家も反対だった。「有機農業をめざしている」と言う

と、近所の農家から言われた。「バカじゃないか。うちの畑にまで雑草が増えるからやめてくれ」

陽子さんと話し合った。「放射性物質が自分たちの畑から出たらあきらめよう。風評だけで最初から夢

を諦めることはない」5月に帰郷して畑を借り、「ゼロからのスタート」を切った。育てるのはブロッコリー、レタス、キヤベツなど。「放射能が出なかつたから」と、香川県にいた陽子さんも2013

年1月に合流した。長男・松陰君(2)を授かり、9月には長女・花ちゃんも生まれた。耕す畑は、徐々に増えた。「この子たちのためにも、出産祝いに使ってもらえる安全な卵をつくらせ」と菊地さん。養鶏で出た鶏糞

を肥料として有機栽培の畑や果樹園にまき、循環させるのが夢だ。地元には、かつての自分のような青年たちがいる。「一緒に農業をやってみなにか」と声をかけている。(本田雅和)

2017年(平成29年)3月9日(木曜日)

福島民友

食育で生命に感謝

相馬 高校生ら鶏調理



相馬市の大野村農園などで5日、県内外の高校生らが生きた鶏をさばいて調理する食育事業が行われ、参加者が命のありがたみを再確認した。

県内の高校生が編集に携わる食材付き季刊情報誌「ふくしま食べる通信」の企画の一環。県内の高校生4人と、都内の高校生、学生ら15人が同農園を訪れ、菊地将兵さんの指導で生きた鶏を絞めた。

その後、市内の大野公民館に移り、参加者が鶏から内臓などを取り除いて可食部分を選別。唐揚げを作って食べた。

鶏のさばき方を教わる参加者たち

「今、欲しい物はありますか？」。路上で生活する男性、いわゆるホームレスの方にその声を掛けたのは今から十年ほど前の二十一歳のころだった。当時の僕は「万引きGメン」というテレビなどでおなじみの特殊な仕事をやる傍ら、東京・池袋で毎週ホームレス支援の炊き出しや夜回り活動などのボランティアに参加し、日本の貧困について勉強していた。

僕自身、親がシングルマザーだったことや裕福でなかったこともあり、世の中の貧困問題の根っこ部分を自分で直接見てみたかったのだ。そんなボランティア生活に慣れてきたある日、初めて会って話し込んだホームレスの方に思わず欲しい物を聞いてみた。

「欲しい物なあ……」。僕は質問を投げ掛けながら「食べ物だろう」と自分の中で答えを用意してしまっていた。ところが、返ってきた答えはまるで違うものだった。

「食べ物はいくらも困っていないんだ。東京のゴミ箱にはいくらでも食べかけの物が捨ててある。店のそばのゴミ箱とかいつもある場所を見つければ何とかなるもんだよ」。

意外な返答に少し驚きながら「では何が困るのですか？」。そう催促するように問い掛けた。「欲しい物は靴だ

必要な物は何ですか

菊地 将兵



も。毎日歩き回って空き缶を探すのにも、靴はあつという間にすり減ってく。でも靴を買いお金はないし、靴が二足そろって落ちてることもなかなかないからな」。

想定していなかった答えに、思わず「なるほど」とうなずきながらおじさんの足を見た。確かにおじさんは穴の

空いたボロボロの靴を履いていて、靴底が見せてもらうとペラペラと靴底が剥がれかけていた。

僕は今まで「靴」というものを深く考えたことがなかった。靴はあることが当たり前だったし、古くなってきたら買い替えるのが当然のことだった。

まだまだ履けるはずの靴を捨てたこと

もある。家のげた箱には、ほとんど履かずに眠っているような靴も何足かあった。思いもよらないようなことで世の中には困っている人がいて、それに気が付かずまだ履ける靴を捨てている自分がある。自分だけじゃなく、世の中のだれだけの人がこのことに気付いているのだろうか」とその時考えさせられた。

その次の週、月に一度程度あるホームレスの方々への無料の衣類配布に、僕はげた箱で眠っていたスニーカーを二足引張り出して寄付した。

(相馬市大坪、大野村農園代表)

「子供にはなるべく食べさせたくな

平成二十三年三月十一日のあの日から、僕の古里である相馬市の農業は大きく変わってしまった。お店に野菜が並ぶ人からは「大丈夫なのか」と尋ねられる。「放射能の農作物だから」と直接言われたことが何度もあった。スーパーに野菜を並べられるようになってもお店に県外産の野菜と相馬市の野菜が並べば、ほとんどの人が県外産の野菜を選ぶような状況だった。

「中国産の方が売れるよ」。追い討ちをかけるようにスーパーの店員からこう言われた。必ず店の商品より二割から三割安く並べないとまともに売れない現状をどうすることもできず、毎日売れ残りの野菜を持ち帰り、自分の家で食べる日々だった。

一番辛かったのは「子供にはなるべく食べさせたくない」と言われた野菜を「うちの子供には食べさせなければ

ならない」生活だった。きちんと放射線検査をして数値が大丈夫なのは分かっている。それでも、周りの皆が危険視する状況に、僕自信も数値を信じていることができず、不安になることもあった。辛いと思ったことも何度もあった。

相馬ミルキーエッグ

菊地 将兵



ない悔しさが逆に「もう一度相馬から全国の人たちが食べたいと言ってくれるような農産品を生み出したい」という気持ちにさせた。何よりも、うちの子供に「胸張って食べさせられる農作物」を生み出したかった。

そのためにたどり着いたのが養鶏だった。どの家庭でも当たり前に食べる

卵を餌にも環境にもこだわり抜いて育て、最高のニトリから卵をとりたいと考えた。自然環境を壊し、子供に食べさせることが不安に思われたこの場所だからこそ自然を大切にしていこう、きだと思った。自分の子供に胸張って食べさせられるこの卵は、当たり前のように他の子供たちにも胸張って食べ

たいというお客さんも増えてきた。「この卵を売りたい」。助産所での昼食にも使われるようになり、あの頃がうそのような広がりを見せている。自家消費に限らず、お祝いの品やお遣い物など、今までの卵では考えられなかった用途としても定着しつつある。

あの当時は確かにつまらなかつたけれど、今うちの子供がうまそうに卵かけご飯を食べてくれる光景を毎朝見るたびに、諦めないで本当に良かったと思う。僕の古里は確かに放射能によって汚され、人々から嫌われた。けれど、その中でも諦めなければ、確かに道はできた。

まだまだこれからではあるけれど、飲食店の方や相馬を訪れた観光客に、地元こんな素晴らしい卵があることを知ってもらいたいと考えている。さらには、日本中の食卓に届けたいと願っている。

(相馬市大坪、大野村農園代表)

ようやくこの時を迎えることができました。東日本大震災、東京電力福島第一原発事故から五年以上がたち、僕はようやく相馬市の農業を「ゼロ」に戻すことができました。

あの日からずっとずっと、僕たち相馬市の農家は放射能という壁に大きく立ちほだかれ、どこに野菜を持っていくにも「放射能の野菜だろ」と言葉投げ掛けられる日々でした。震災から三年はその言葉を言われ続け、四年目以降も言われることは少なくなりましたが、他県の野菜と同じ値段、同じ品質なら他県のを買おうといった人たちも少なからず、苦しい思いを強いられる歳月でした。

その中で僕ら若手が相馬市で農家になる活動していくことはマイナスをゼロに戻す作業であり、まだスタート地点にもたどり着けていないといった気持ちで僕の中でありました。それでも諦めずじやってこられたのは、自分の

生まれ育った古里が好きだったこと、県内外を問わず、いつも応援してくれた人たちがいたこと。そして、何よりも家族、子どもたちがいてくれたことが大きく僕の背中を後押ししてくれました。

相馬土垂

菊地 将兵



壊された古里の自然をもう一度大切にすることはどうしたらいいか。これから相馬市の農産品をみんなに「欲しい」と言ってもらえる日がまた来るためにはどうしたらいいか。その答えの一つとして「相馬にかつてあった相馬だけの伝統野菜をもう一度僕たちの手で復活させよう」と誓いました。

ここにしかない物なら、他県や他国と競い合う必要はありません。相馬市に来てくれたみんなに胸を張って「これが相馬の伝統野菜です」と渡せるんです。

いずれ旅館や飲食店でも秋になれば当たり前のように相馬の伝統野菜が食べられるようになり、手土産としても

相馬市の秋はこれだと選んでもらえるようになってほしい。地元の子どもたちは植え付けから収穫まで畑に来てくれて、学校給食や芋煮会までこの伝統野菜を使って食べるようになってほしい。

たった一つの伝統野菜が相馬のあらゆる流れを象徴するきっかけになってほ

しい。数十年と、表舞台から姿を消していたこの伝統野菜が、今ようやく目の見える場所に戻ることができました。僕ら相馬市の農家と同じくこの伝統野菜もここからが始まりです。相馬市の伝統野菜である里芋「相馬土垂」をうまくだれ」。お披露目の場に集まってくれた県内外からの皆さんと共に収穫し、芋煮会まで開催することができました。

「この日が最初だったんだ」。数十年後のまだ見ぬ孫たちに語り継ぐ日が来られるまで、僕たちはこれから、もう二度と手放さないように大事に大事に守り抜きます。集まってくれた皆一人一人の表情を見ながら芋煮会の汁をすすり相馬土垂を口に運ぶたびに、やってきたことが何も間違いではなかったこと、そして、自分が相馬に生まれたことを心から誇りに思えた日になりました。

(相馬市大坪、大野村農園代表)

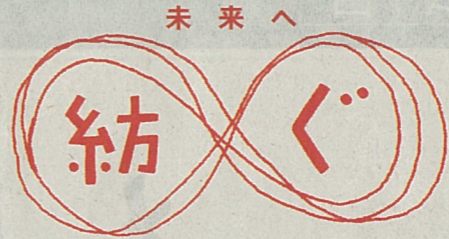
広告

企画・制作 / 読売新聞社広告局



福島県相馬市の田園で子ども記者と談笑する復興支援センター「MIRA」の黒田夏貴さん(写真右から2人目)、大野村農園の菊地将兵さん(同5人目)、学生団体「trees」代表の深谷華さん(同6人目)

古里再興一歩ずつ前へ



未来へ
つぐ
リレープロジェクト

主催 / 読売新聞大阪本社
後援 / 福島県、宮城県、兵庫県
協賛 / 新コスモス電機、大和リース、
鎮守の森のプロジェクト

神戸から東北へ 被災6年目の今を知る旅

きょう「防災の日」

阪神大震災を経験していない神戸・阪神間の子どもが東北の被災地取材し、防災への思いを新たに。「未来へつぐ」リレープロジェクト。3回目となる今年は、小学生と保護者の8組16人が8月1〜2日、宮城県と福島県を訪れ、被害を乗り越えて、古里の再興へと歩み始めた住民らに出会った。

安全な暮らし 自分の力で

子ども記者がまず訪れたのは、津波被害が大きかった宮城県名取市閑上地区の復興のシンボルとして、地元朝市をいち早く再開させた櫻井広行さん(62)は防災教育にも力を入れており、「地震から津波到達まで1時間あり、すぐ逃げれば地区のみんなが助かったはず。命は自分で守るしか



現地を襲った津波と同じ高さ(8.4m)の名取市閑上の慰霊碑。種の慰霊碑から発芽した「芽生えの塔」が伸びていく姿を表す

ない」と訴えた。慰霊碑や地区を一望する日和山などを巡り、被災時の様子を語った。その後、仙台市内の「津波避難タワー」(定員300人、約10分)を訪ね、震災後進む防災対策にも触れた。福島県では、原発事故による風評被害に負けまいと、「食」の魅力発信に取



1 仙台市津波避難タワー。現在は市内に3基設置されている
2 300羽の鶏が自由に暮らす養鶏場で子ども記者も餌やりにも挑戦

り組む相馬市の人々を訪ねた。地元産品の詰め合わせを全国発送している学生団体「trees(ツリース)」の深谷華さん(20)らに取材。農家の取材レポートと一緒に発送しており、「風評に負けずに頑張る生産者の熱い思いも届けたい」と語った。

を体験。周囲の反対を押し切り、震災後にUターン就農した理由を「他県と同じような農産物では福島産は売れにくい。それなら、ここにしかない物を生み出したい」と覚悟をみせた。福島市の「除染情報プラザ」では、放射性物質を減らす取り組みについて学んだ。

同プラザアドバイザーの青木仁さん(64)は放射性物質の自然半減には30年かかるものもあると説明し、「安心して生活できるように、頑張って人間力で減らさない」と力を込めた。東京電力ホールディングス福島復興本社の田添邦彦さん(48)は、どのように事故が起きたかと、30〜40年続く廃炉の工程を解説した。

未来担う若い力育てる



1 ふたば未来学園高校の生徒と交流。福島クイズで現状を知る
2 「千年希望の丘」で植樹による減災を学ぶ



2日目は復興を担う人材の育成を目指し、昨年開校した福島県立ふたば未来学園高校(広野町)を訪問。同校の仮設校舎を建設した大和リースの井上伸一さんから話を聞いた後、地域づくり活動をする「社会起業部」の生徒らと交流した。

2年古内伸幸さんは「自然の力で発電する再生可能エネルギーを学びにドイツに行く」、1年林優弥さんは「地元のため役立てる大人になる」などと夢を語った。最後に、宮城県岩沼市にある津波対策の人工高台「千年希望の丘」取材。そこで植林活動をする「鎮守の森プロジェクト」の西野文貴さん(28)は「津波に耐えたシイやタブで森を造れば、自然の力で減災ができる」と説明。子どもたちも、密接して植えられたことで競争し合い、力強く成長した木々に触れていた。

「高校での交流会で、5年たっても再開できない店が多いことや、除染作業をしている人の苦勞を知って驚いた。福島はまだ、復興しなければいけないことがたくさんあると感じた」
陽明小6年・中村総秀くん(川西市)

「地震だけでなく、放射能の被害もあったのに、相馬の菊地さんたちは『古里を立て直す』という目標を立てている。前を向いている福島の人々に、本当の『強さ』を感じた」
鈴蘭台小5年・古川蓮さん(神戸市)

ふくしま産業賞受賞事業所 新たな連携 本格化

米屋企業(須賀川) 大野村農園(相馬)

ミルクィー卵料理提供

福島民報社の第二回ふくしま経済・産業・ものづくり賞(ふくしま産業賞)受賞事業所の新たな連携の取り組みが本格化してきた。

ふくしま産業賞特別賞の米屋企業(須賀川市)が運営する「おとぎの宿米屋」で一日、金賞の大野村農園(相馬市)が生産する相馬ミルクィーエッグを使った料理の提供が始まった。



大野村農園の卵でシフォンケーキを作る山本さん

一つは米屋の人気企画「春のおとぎ会席」で提供する特製茶わん



特製茶わん蒸しの「山でひんやすみ」

二月に福島市で開催されたふくしま産業賞交流会の席上、米屋企

業の有馬裕寿社長・みゆき常務夫妻と、大野川一雄組合長と、東北



業務提携を結び握手する長谷川組合長(中央左)と岡崎社長(同右)。左端は渡辺常務、右端は岩橋常務理事

もう一品は米粉シフォンケーキ。甘さを抑え、アクセントに天然塩を加えた。卵の風味が味わいに膨らみと奥行きを与えており、生クリームやジャムとの相性が抜群だ。厨房(ちゅうぼう)担当の山本大輔さんがレシピを考えた。

JA会津よつば 銀嶺食品(福島)

6次化へ包括提携締結

会津全域を管内に持つJA会津よつば(本店・会津若松市、長谷川一雄組合長)と東北

地方を事業主体とするパン製造販売の銀嶺食品(本社・福島市、岡崎社長)は一日、

六次化事業に関する包括的業務提携を結んだ。調印式は会津若松市

立ち会った。席上、会津産米を使用した長谷川組合長は「新たな六次化産品のモデルとして幅広く展開し、会津や福島よつばは規格外で流通されない会津産コシヒカリを提供、銀嶺食品がパンを製造し、会津よつばの直売所で販売

村農園の菊地将兵代表が懇談した。魅力的な食材としてミルクィーエッグを使うことが決まった。菊地代表は「有名な旅館で使用していただけるのはとても名誉なこと。全国の人が相馬を知ることになった。美味しい」と願っている。有馬みゆき常務は「良質な食材は安心して食べ物を食べたいというお客さまを増やして

「新しい」と話した。シフォンケーキは宿泊客以外にも販売する。一個千五百円(税別)で前日昼までに電話予約が必要。問い合わせは米屋 電話0248(62)7200へ。

する。コメの消費拡大、パンの販路確保などが期待される。初年度のパンの販売目標は五千万円に設定した。四月一日から会津若松市のファーマーズマーケット「まんまーじや」などで先行販売し、取扱店舗を拡大。インターネットでも販売し、全国に広める。銀嶺食品は、第二回ふくしま産業賞の銀賞を受賞している。

2017年(平成29年)2月15日(水曜日)



立谷市長に受賞を報告した菊地代表(左)



ふくしま産業賞 大野村農園 菊地代表が訪問

相馬市長に受賞報告

福島民報社の第二回ふくしま産業賞で金賞を受けた相馬市の大野村農園の菊地将兵代表

は十三日、市役所を訪れ、立谷秀清市長に受賞を報告した。

農園ではこだわりの卵「相馬ミルクィーエッグ」を生産・販売している。菊地代表は餌に魚のあらや地元産の米や野菜などを与えていることなど特徴を説明した。各方面から引き合いが多いことを挙げ、生産規模を拡大する考えを伝えた。

立谷市長は相馬ミルクィーエッグを口頃から食べており「とてもおいしい」と評価し、さらなる活躍に期待を寄せた。

先端がややとがった形をしている相馬土垂



伝統野菜の里芋

相馬地方で栽培が盛んだった里芋「相馬土垂」を復活させる取り組みに、相馬市の農業菊地将兵さん(30)が挑戦している。相馬の伝統を受け継いだ農作物を地域ブランドとして育てることで、「若者が相馬で農業をするきっかけを作りたい」と意気込んでいる。

相馬土垂 復活に挑む

若手農家 地域ブランド育てる

相馬地方はもとも里芋栽培が盛んな地域で、相馬市坪田の八幡神社では毎年秋の例大祭で「いもずいも」と呼ばれる里芋の吸い物が提供されるなど、地元の食文化にも根付いている。群馬県などで農業を学んでいた菊地さんは東日本大震災の後の2011年5月、出身地の同市へ戻り、畑作を始めた。農業を盛んにするために売りになる農作物を作ろうと注目したの



長男と一緒に相馬土垂を収穫する菊地さん(相馬市で)

が、昔から育てられてきた「伝統野菜」だった。県などに問い合わせ、相馬地方には「相馬土垂」という里芋があったことを知ったという。1931年から続く種苗店を相馬市中野で営む佐々木善幸さん(69)によると、相馬土垂はラッキョウのよう

に先端がややとがった形で、粘りが強いのが特徴。20年ほど前までは種芋を農家へ卸していたが、農家の要が減っていったとみられる。菊地さんは風評にも負けない地元の特産を求め、帰郷直後から相馬ならではの野菜を探した。唯一の伝統野菜として相馬土垂の存在を知り、種芋を求めて関係者や知人、種苗店などを訪ね回った。ただ、地元の人

が、昔から育てられてきた「伝統野菜」だった。県などに問い合わせ、相馬地方には「相馬土垂」という里芋があったことを知ったという。1931年から続く種苗店を相馬市中野で営む佐々木善幸さん(69)によると、相馬土垂はラッキョウのよう

幻の相馬土垂を探していた菊地さんは昨春秋、新地町の農作物直売所で似た形をした里芋を見つけた。それを知り合いの農家に確認してもらい、相馬土垂だとわかったという。自家用で現在も栽培している、相馬市今田のイチゴ農家太田俊一さん(61)は「煮崩れしやすいがもちもちしていて、煮つ転がしや豚汁にして食べる」と話す。

得た。今年5月、仲間と土垂を植え初収穫を迎えた。芋煮会も開き、参加者が土垂を味わった。収穫に参加した食材付き季刊情報誌「そうま食べる通信」の共同編集長で漁師の菊地基文さん(40)は「関東からも参加があったのは期待の表れ。食べる通信でもしっかり取り上げ、多くの人に土垂を知ってほしい」と話した。将兵さんは相馬土垂を地元の旅館で扱ってもらうほか、生産グループをつくり、流通も視野に入れる。土産品として定着すれば地域経済の振興にもつながる。忘れられた伝統野菜をもう一度、根付かせる。展望は広がる一方だ。(谷口隆治)



伝統野菜 復活の一步

サトイモ在来種 相馬土垂を収穫

収穫された相馬土垂。市販のサトイモより縦長の形が特徴



菊地さん「やっ」といってここまで来た」まで来た」。相馬土垂を前に、菊地さんは感慨深げだ。地元の関係者のほか、インターネットで情報を知った関東圏の有志など約30人が集まり、相馬土垂を掘った。有機栽培した自慢の野菜に付加価値を求め、地元ならではの農産物を探し歩いて5年。菊地さんは「諦めかけたけれど、やって良かった」と笑う。相馬土垂は昭和40〜50年代に一部の農家で栽培された。現在のサトイモより強い粘り気が特徴。ラッキョウのような縦長の形で、皮のむきづらさから次第に需

要が減っていったとみられる。菊地さんは風評にも負けない地元の特産を求め、帰郷直後から相馬ならではの野菜を探した。唯一の伝統野菜として相馬土垂の存在を知り、種芋を求めて関係者や知人、種苗店などを訪ね回った。ただ、地元の人

得た。今年5月、仲間と土垂を植え初収穫を迎えた。芋煮会も開き、参加者が土垂を味わった。収穫に参加した食材付き季刊情報誌「そうま食べる通信」の共同編集長で漁師の菊地基文さん(40)は「関東からも参加があったのは期待の表れ。食べる通信でもしっかり取り上げ、多くの人に土垂を知ってほしい」と話した。将兵さんは相馬土垂を地元の旅館で扱ってもらうほか、生産グループをつくり、流通も視野に入れる。土産品として定着すれば地域経済の振興にもつながる。忘れられた伝統野菜をもう一度、根付かせる。展望は広がる一方だ。(谷口隆治)

地元米で夢の卵

相馬 逆風に挑む菊地さん夫妻

放し飼いにされたニワトリにエサを与える長男松陰ちゃんを見つめる菊地さん夫妻。相馬市大坪で。



震災から11日で4年半。風評被害による農業への逆風がいまだに続く福島で、周囲の反対を押し切り養鶏に飛び込んだ若い夫婦がいる。相馬市大坪の菊地将兵さん(29)と陽子さん(30)。エサ作りから飼育環境まで徹底した自然農法にこだわり、収入は不安定だ。それでも「全国に古里を発信する特産品に」と夢を追う2人の意思は固い。

【大塚卓也】

周囲の反対押し切り

ぬかるむ田んぼのあぜ道を下り、ビニールハウスの戸を開けると、地面を覆うもみ殻の上を11羽のニワトリが歩き回っていた。

「4月にヒヨコから育て始め、8月にはやっと卵を産んだんです。今日は10個。まだ量が安定しなくて」。身おもの陽子さんが腰をかかめて産卵箱をのぞき込んだ。長男の松陰ちゃん(2)が小さなバケツを傾けると、トリが一斉にエサの受け皿に群がってきた。

「4月にヒヨコから育て始め、8月にはやっと卵を産んだんです。今日は10個。まだ量が安定しなくて」。身おもの陽子さんが腰をかかめて産卵箱をのぞき込んだ。長男の松陰ちゃん(2)が小さなバケツを傾けると、トリが一斉にエサの受け皿に群がってきた。

「朝、『エサやりに行くか』って聞くと、喜んでついてくるんですよ。トリを指さす松陰ちゃんを将兵さんが抱き上げた。「仕事に打ち込む親を子どもが側で見て、自然と覚えていく。昔の農家では当たり前でしたよね」。幼少期に両親と離散し、兼業農家の祖父母に育てられたという将兵さん。ずっと抱いてきた「理想の家族」の姿が、目の前にある。

「大産生の大手業者が使う飼料はカロリーが高過ぎ、健康にいいはずがない。液状のフンはトリアゲが刺している表を産んだんです。今日は10個。まだ量が安定しなくて」。身おもの陽子さんが腰をかかめて産卵箱をのぞき込んだ。長男の松陰ちゃん(2)が小さなバケツを傾けると、トリが一斉にエサの受け皿に群がってきた。

「大産生の大手業者が使う飼料はカロリーが高過ぎ、健康にいいはずがない。液状のフンはトリアゲが刺している表を産んだんです。今日は10個。まだ量が安定しなくて」。身おもの陽子さんが腰をかかめて産卵箱をのぞき込んだ。長男の松陰ちゃん(2)が小さなバケツを傾けると、トリが一斉にエサの受け皿に群がってきた。

「大産生の大手業者が使う飼料はカロリーが高過ぎ、健康にいいはずがない。液状のフンはトリアゲが刺している表を産んだんです。今日は10個。まだ量が安定しなくて」。身おもの陽子さんが腰をかかめて産卵箱をのぞき込んだ。長男の松陰ちゃん(2)が小さなバケツを傾けると、トリが一斉にエサの受け皿に群がってきた。

「大産生の大手業者が使う飼料はカロリーが高過ぎ、健康にいいはずがない。液状のフンはトリアゲが刺している表を産んだんです。今日は10個。まだ量が安定しなくて」。身おもの陽子さんが腰をかかめて産卵箱をのぞき込んだ。長男の松陰ちゃん(2)が小さなバケツを傾けると、トリが一斉にエサの受け皿に群がってきた。

エサは地元の農家から買った玄米や、煮込んだ魚のアラを乾燥させて混ぜた特製だ。使うコメは1日7キ。毎日コメも食べさせ、乳牛も畑が消えてしま

「朝、『エサやりに行くか』って聞くと、喜んでついてくるんですよ。トリを指さす松陰ちゃんを将兵さんが抱き上げた。「仕事に打ち込む親を子どもが側で見て、自然と覚えていく。昔の農家では当たり前でしたよね」。幼少期に両親と離散し、兼業農家の祖父母に育てられたという将兵さん。ずっと抱いてきた「理想の家族」の姿が、目の前にある。

「朝、『エサやりに行くか』って聞くと、喜んでついてくるんですよ。トリを指さす松陰ちゃんを将兵さんが抱き上げた。「仕事に打ち込む親を子どもが側で見て、自然と覚えていく。昔の農家では当たり前でしたよね」。幼少期に両親と離散し、兼業農家の祖父母に育てられたという将兵さん。ずっと抱いてきた「理想の家族」の姿が、目の前にある。

震災4年半

どうぼくの今

「コメと子やもに安心して食べさせられる肉と卵を自分で作りたい」と今年春から始めた養鶏は、ようやく来月出荷で

「朝、『エサやりに行くか』って聞くと、喜んでついてくるんですよ。トリを指さす松陰ちゃんを将兵さんが抱き上げた。「仕事に打ち込む親を子どもが側で見て、自然と覚えていく。昔の農家では当たり前でしたよね」。幼少期に両親と離散し、兼業農家の祖父母に育てられたという将兵さん。ずっと抱いてきた「理想の家族」の姿が、目の前にある。

「朝、『エサやりに行くか』って聞くと、喜んでついてくるんですよ。トリを指さす松陰ちゃんを将兵さんが抱き上げた。「仕事に打ち込む親を子どもが側で見て、自然と覚えていく。昔の農家では当たり前でしたよね」。幼少期に両親と離散し、兼業農家の祖父母に育てられたという将兵さん。ずっと抱いてきた「理想の家族」の姿が、目の前にある。

「朝、『エサやりに行くか』って聞くと、喜んでついてくるんですよ。トリを指さす松陰ちゃんを将兵さんが抱き上げた。「仕事に打ち込む親を子どもが側で見て、自然と覚えていく。昔の農家では当たり前でしたよね」。幼少期に両親と離散し、兼業農家の祖父母に育てられたという将兵さん。ずっと抱いてきた「理想の家族」の姿が、目の前にある。

つながりが可能性開く

ふくしま産業賞 交流会
 ふくしま経済・産業・ものづくり賞

福島市の民報ビルで四日に開かれた福島民報社の第二回ふくしま経済・産業・ものづくり賞(ふくしま産業賞)の交流会では受賞企業・団体の代表者が業種や地域の枠組みを超えた新たなつながりを育んだ。起業を支えた「恩師」との再会もあり、福島産の発展への熱い思いを抱いた来場者で埋まった会場は熱気に包まれた。

大野村農園(相馬) × おとぎの宿米屋(須賀川)

自慢の卵 宿で提供

金賞に輝いた相馬市の大野村農園が生産・販売している卵「相馬ミルキーエッグ」が特別賞となった須賀川市の米屋企業が営む「おとぎの宿米屋」で提供される見通しとなった。

「地元のコメや魚のあら、大豆などをニワトリの餌とし、他にない卵を生産している。受賞者スピーチで大野村農園代表の菊地将兵さん(三)が発した言葉に米屋企業社長の有馬裕寿さん(五)と妻で常務の有馬みゆきさん(五)は強いこだわりを感じた。

おとぎの宿米屋は地産を中心に安全・安心でおいしい食材にこだわっている。朝食や夕食のすき焼き、茶わん蒸しなどに主に会津産の卵を使っている。冬場は供給量が減り、県外産を仕入れる

提案。菊地さんは「素晴らしい出会いになった」と思いに応える喜び使ってみたい」と賞格を示した。



大野村農園代表の菊地さん(右)の思いを聞く米屋企業社長の有馬裕寿さん(左)と常務の有馬みゆきさん(中央)

(3) 2016年(平成28年)12月20日(火曜日) 福

金賞 大野村農園 (相馬)

地元産飼料で良質な卵



家族とともにニワトリを世話する菊地代表

相馬市郊外の田園地帯にあるビニールハウスで養鶏に取り組んでいる。生産された卵は「相馬ミルキーエッグ」として県内外に流通し、人気商品となっている。

菊地将兵代表(三)は相馬市の小中学校を卒業し、仙台市の高校に進んだ。その後、全国各地の農家に住み込みで生活しながら農業を学んだ。古里に戻り就農を考えたとき、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故が起きた。「こんなときだからこそ地元で農業をしたい」と決意を固めた。平成二十三年五月に帰郷し、野菜作りと養鶏を始めた。

相馬地方のサトイモの在来種「相馬土垂(どたれ)」の復活にも乗り出した。今後、生産グループの創設を目指している。「大規模農家と競い合っても負けてしまつ。『ここにしかない』を生み出し、農業に携わる若手が増えてほしい」と相馬の活性化を願っている。

×モ
 ▷設立—平成24年1月
 ▷代表—菊地将兵
 ▷従業員数—4人
 ▷住所—相馬市大坪字前迫115
 ▷電話番号—090(7574)3114

福島民報2015.7.22. 鶏への餌やりを体験する参加者



相馬 親子8組が農業体験

相馬市石上の大野村農園で19日、鶏の飼育やトマト、ナスなどの収穫体験が行われ、同市の親子8組が自然と触れ合った。

東日本大震災後に同農園をオープンした地元農家の菊地将兵さんが、食育の一環で農業を経験してもらおうと企画。親子8組が土のおいしさを感じながら、普段食べているものが育つ過程などを学んだ。飼育体験では、子どもたちが恐る恐る鶏に近づき、くちばしの先に餌をまいた。鳴き声や羽の音に驚かされながら、命の温かさに触れていた。